

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 8 日現在

機関番号：82616
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2011
 課題番号：20700659
 研究課題名（和文） コミュニケーション能力を含む包括的な言語運用能力評価
 のための総合問題の開発的研究
 研究課題名（英文） Development of non-curriculum-based test questions
 evaluating comprehensive linguistic performance
 研究代表者
 伊藤 圭（ITO KEI）
 独立行政法人大学入試センター・研究開発部・准教授
 研究者番号：60332144

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：科学教育・教育学

キーワード：大学入試，総合試験，適性試験，テスト理論，教育測定，教授学習支援システム

1. 研究計画の概要

近年の大学進学希望者と入試選抜方法の多様化に伴い、学習到達度だけではなく、より多面的な能力を測る総合的な問題（総合試験）についての検討が進められている。本研究では、広範な分野において共通に必要な言語運用能力を包括的に評価するための総合試験について研究を行う。また、教科科目フリー型総合試験の作題上の課題の一つである、受験者属性間における問題の公平性について検証を行う。

まず理論的なアプローチとして、既存の言語能力に関する構成概念を整理し、言語能力の運用的側面を評価する試験に適し、実際のテストの基本的枠組みとなり得る構成概念について検討を行う。

次に実証的なアプローチとして、既存の試験のうち、言語推論能力などの各種の言語能力を測定するタイプの試験で実際に測定されている能力の特定を試みる。総合試験成績と言語熟達度、課題遂行・問題解決に必要な能力・資質などに関するアンケート、各種学科試験成績との関係について分析する。

これらの研究を通じて、総合試験に適した問題内容、試験の用途、測定対象範囲、他試験との関連などについて検討を行う。

受験者属性間における問題の公平性については、主要な教科科目の学科試験の総合点を総合試験得点に関する共変量として採用し、共分散分析的手法により受験者属性間の総合試験の平均点差を調べる。

2. 研究の進捗状況

まず、総合的な能力を測るタイプの試験に

ついて分析を行った。学力に関する各種の能力を代表するものとして既存の教科科目に着目し、これら全てを含めた全体的な学力構造における言語能力に関する総合試験の成績の位置づけを、モニター調査データに基づき、探索的に検証した。具体的には、教科科目フリー型総合試験の「コミュニケーション・読解・表現」と「情報把握・論理的思考」のテストおよび主要8教科科目（国語、地歴、公民、数学Ⅰ・数学A、数学Ⅱ・数学B、理科、英語、英語リスニング）のテストの得点の相関行列に基づく因子分析を行った。

その結果、総合型学力と教科科目型学力を分ける因子の存在、およびその因子と問題解決力や課題遂行力の基礎となる情報理解力、論理的思考力、表現力との関連性が確認された。また、文系科目との関係から、総合試験の「コミュニケーション・読解・表現」が語句の意味や文脈の把握、表現の読み替えなどを通して複数の可能性を比較し、相対的により適切な判断を行う能力などに関係していることが確認された。

次に、学習到達度を測るタイプの試験について分析を行った。モニター調査データに基づき、大学入試センター試験英語（筆記およびリスニング）得点と文章化された言語熟達度との対応付けを行い、典型的な言語テスト（英語）の測定内容の構造を分析するとともに、受容的言語能力（聴解力および読解力）とどのように関係しているかを分析した。

その結果、特に、センター試験「英語」の筆記テストとリスニングテストの間で聴解熟達度との相関の度合いに差が見られ、かつリスニングテストの方が高い相関を有していることが判明した。このことからリスニングテストが筆記テストとは独立に一定の役

割を果たしていることが推察された。また、能力記述文で表した言語熟達度とテスト得点との対応関係を示した **Mastery Map** を作成した結果、センター試験「英語」が測定している能力は主に基礎段階の言語使用者レベルであり、高校段階の学力を確認するという意味では妥当なレベルであることが推察された。さらに、言語活動、言語能力、言語使用領域等によって分類された領域ごとの尺度（言語熟達度尺度を構成する下位尺度）との関係から、センター試験「英語」は **CEFR**（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠）で想定している活動領域をまんべんなく測定していることが推測された。

総合試験問題の受験者属性間における公平性については、情報把握力や論理的思考力を測る試験は理系および男性にやや有利な傾向が見られ、読解力や表現力を測る試験は文系にやや有利な傾向が見られた。

以上の研究で得られた知見については、学会や論文雑誌等で報告を行った。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

平成 20 年度から 22 年度で、研究計画期間の大半が終了した。この期間内に、研究計画で実証的側面からの研究として計画した、教科科目フリー型総合試験および典型的な言語テストである「英語」で測定されている能力について分析が進み、結果を学会や論文雑誌等で報告することができた。

4. 今後の研究の推進方策

言語運用能力に関する構成概念の整理とテスト構成概念の枠組みにおける位置づけの検討は、研究の初期段階で行う予定であったが、研究の進捗状況等を考慮し、後半に実施することが適切と判断した。したがって、当初予定を若干修正し、今後は、主に理論的な側面に関する研究を進めつつ、実証的研究を補完する。特に、言語テストや言語教育等における専攻研究に関する文献を総覧し、既存の言語能力およびコミュニケーション能力の構成概念をテストの構成概念の構築という観点から整理する。さらに各能力を表す実際の行動を洗い出し、各能力の操作的定義を試みる。

実証的研究としては、これまで冊子単位で行ってきた試験得点と言語熟達度との関係の分析を、例えば大問単位で行うなど、より細かく分類された能力要素について行う必要がある。また、これまで英語に関する受容

的言語能力（読む、聞く）のみを対象とされていたが、さらに産出的言語能力（書く、話す）を対象とした分析を進めると共に、英語以外のテスト、例えば国語現代文等についても分析を進めていく。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 伊藤圭, 林篤裕, 椎名久美子, 田栗正章, 小牧研一郎, 学科試験および科目得意度との比較による総合試験の妥当性の検証, 日本テスト学会誌, Vol. 6, No. 1, 113-124, 2010, 査読有
- ② 伊藤圭, 大久保智哉, 柳井晴夫, 項目困難度による総合試験の問題内容分析, 大学入試研究ジャーナル, Vol. 20, 63-73, 2010, 査読有
- ③ 林篤裕, 伊藤圭, 総合試験の実態調査, 大学入試研究ジャーナル, Vol. 20, 57-61, 2010, 査読有

〔学会発表〕（計 5 件）

- ① 荒井清佳, 橋本貴充, 杉澤武俊, 荘島宏二郎, 伊藤圭, センター試験「英語」得点と受験者の主観評価に基づく英語能力イメージとの比較, 日本テスト学会第 7 回年次大会, 2009 年 9 月 3 日, 名古屋大学東山キャンパス
- ② 伊藤圭, 大久保智哉, 柳井晴夫, 困難度指数による総合試験問題の項目分析, 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第 4 回大会, 2009 年 5 月 20 日, 学術総合センター（東京都）
- ③ 林篤裕, 伊藤圭, 総合試験の実態調査, 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第 4 回大会, 2009 年 5 月 20 日, 学術総合センター（東京都）
- ④ 椎名久美子, 伊藤圭, 教科・科目フリー型の総合試験における問題解決方略と資質との関係, 日本図学会 2009 年度秋季大会, 2009 年 11 月 28 日, 東京都市大学
- ⑤ 伊藤圭, テスト得点が表す能力の具体化: テストをより有効に利用するために, 日本教育心理学会第 50 回大会, 2008 年 10 月 13 日, 東京学芸大学